

## ありがとう、勿体ない、おかげさま(AMO)のころ

### 一、はじめに

前号で「ありがとう、もったいない、おかげさま(AMO)活動」のコンセプトの意味するところを訪ねてみました。その後、御門主の『愚の力』という新書を読ませて戴きました。そうすると面白いことがわかりました。実は、「おかげさまとありがとう」は、それより前、今から三十六年前の親鸞聖人御生誕八百年の記念法要で前門様が掲げられたお言葉だったというのです(Ref 大谷光真『愚の力』P29)。

直後の八十年四月に現ご門主は『教書』をお出しになり、希望の時代から、やがてくる時代の転換期を見越して「罪悪生死の凡夫であることにめざめた喜びと慚愧の生活」という概念を打ち出していच्छいます。

そうすると「ありがとう、もったいない、おかげさま(AMO)」のころは、「おかげさまとありがとう」という希望の道行に立つ私は、如来様の智慧の光に照らし出されてわが身を凡夫であるとの自覚のもとに、喜びと慚愧のうちに歩みゆく道行きを浮き彫りにする言葉だと云う風に捉えなおすことができるように思われるのです。

### 二、希望の時代から自覚の時代へ

前門様が生きられた時代は、戦争前から始まり(当時は、十五年戦争の時代だともいわれています)、日中戦争、太平洋戦争と戦争が頂点に達し、そして敗戦を迎えたのですが、勤勉な日本人の特質がよく生かされて経済が復興しつつあったさ中であり、丁度一九七三年頃は、世の中の進歩が信じられていた時代ですから、今が「不安の時代」だとすれば「楽観の時代」だといえるでしょうと、あります。

そんな中で「おかげさまとありがとう」は生活の中で言葉がそのまま

具現化し易いという点で優れていてご門徒の皆様方によく受け入れられたのだそうです(Ref 大谷光真『愚の力』P29~)。

その直後に『成長の限界』という書物が一世を風靡し、資源の枯渇面から警鐘がならされましたが、やがて一九九七年のCOP三( )での京都議定書の頃からは、地球温暖化問題が孫子の時代に向けての最大の課題であることが浮かび上がってきました。加えて〇七年のサブプライムローンに端を発した世界金融危機が人々の暮らしを直撃して参りました。

#### 註:COP三 気候変動枠組条約第三回締約国会議

資源の浪費も、炭酸ガス排出も、金融危機もいずれも人間中心の近現代以降の経済活動に起因します。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)のパチャウリ議長は、いまこそ「少欲知足(足るを知る)」の東洋の智慧が顧みられなければならないと訴えていच्छいます。

こうして無条件の希望の時代から、人間中心の価値観を顧みる自覚の時代が始まったのだということが出来ます。

### 三、罪悪生死の凡夫であることにめざめた、喜びと慚愧の生活とは

私自身を振り返る、自らを顧みることということは、人間にとって容易なことではありません。

なぜなら人間と云うのは自らを中心に生きているからです。とりわけ私たちは、戦後の学校教育を通じて「自我の確立」という教育を受けたことによつていよいよ自らを顧みることが不得手になったからです。

そのような私たちの日常の認識の範囲は、せいぜいこの世の生のその時々のあるさまや身の回りの出来事の範囲に留まってしまいます。

これに対して「罪悪生死の凡夫」というのは、生まれ変わり死に変わりして数多の迷いの生死(衆生)を繰り返してきた私はそのままでは迷いの境涯からは決して抜け出すことのできない存在であるという自覚を申し

ます。認識の範囲が「**衆多の生死**」という範囲に及ぶのです。

それゆえ、そのような私がもしも私自身を振り返って「罪悪生死の凡夫」という自覚を頂戴できるとしたら、それは、全く、阿弥陀如来の智慧の光に照らし出されて初めて頂戴できる自覚だと言わねばなりません。

実は、「少欲知足」のコンセプトに目を開かれるのも、こうして、罪悪生死の凡夫の自覚に立って初めて可能になるのだということが出来ます。

人間以外の生物は、食欲が満たされればそれ以上の食物をむさぼろうとはしないのに、人間だけが欲望の天井を知らずそれによって地球上のあらゆる生命の存続を危うくしてしまっているのですから人間として多いに恥ずべきことであります。

それでは、御門主のおっしゃる「**罪悪生死の凡夫であることにめざめた、喜びと慚愧の生活**」とはどういうことをいうのでしょうか。

罪悪生死の凡夫は自らの力では迷いの世界を抜け出すことができません。その姿をご覧になってこれを救い取りたいとご本願をお建て遊ばしたのが法蔵菩薩(阿弥陀如来の前身の菩薩のお名前)でありました。

やがて本願力廻向のお名号の救いというご本願が叶って法蔵菩薩は阿弥陀如来におなりあそばしました。ご本願が叶ってお名号が出来上がったのですからお名号には本願力が備わってあります。それゆえ、お名号のことをときに「名願力」とも称するのであります。お名号は衆生救済の本質であり働きであります。だからお名号は「本願力」「力」だと言う風についてでもよい、逆にいえば「力」といういい方が許されるのはお名号についてであるということが出来ます。

衆生を救済するために如来はその本願力を衆生に廻向する(他力廻向)という方法をお取りになります。

具体的に申しますと、南無阿弥陀仏のお名号を称えせしめようと第十

八願文に誓って下さっています。

そこで如来様の願いの通りに、私が「南無阿弥陀仏」と称えるとどうでしょう。その途端「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。この聞こえて下さった南無阿弥陀仏が実は阿弥陀如来のお喚び声だということです。

そうすると「お喚び声に呼び覚まされること(聞名)」、これこそが最初で最後の凡夫の務めだと申すことができようかと存じます。

南無阿弥陀仏のお喚び声が如来様のお喚び声だと気づかしめられたそのときこそが、実は浄土真宗では信心一つでお救いに与るというその信心を頂戴した瞬間だということ出来ます。

その瞬間、如来様のまことのお心(本質はお名号)が私のうちにお宿り戴き、お宿り下さったお名号による内からのお育てに与るのであります。

やがてお宿り下さった如来様の智慧の光によって私自身の愚かな姿が照らし出されますという「お恥ずかしいこととございます」という慚愧の思いが湧き起って下さいます。同時にその私こそが如来様のお救いのお目当てだったと気づかされます。

こうして、「**勿体無い**」とは、愚かな私をお救い下さるご本願の働きを指して感得したお同行の口を衝いて出る歡喜の言葉であるということが知られるのであります。

ご門主は明確にはしていらっしゃいませんが、「愚の力」とは、如来様より真のお心(その本質はお名号)を頂戴した凡夫が、お名号のお力によって自らの姿を愚かと顧みせしめられ、浄土への白道をお育て・お導きに与る力だと頂戴することができるのではないのでしょうか。合掌

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥	
<a href="http://syohgakuji.web.fc2.com/">http://syohgakuji.web.fc2.com/</a> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp	